

# たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校 横山文朗

## わたしのふるさと

わたしが生まれた総社市池田地区は、谷あいに一筋槇谷川が流れ、多くは山林で、狭い田畑が川をはさんでわずかばかりに広がっている。以前は林業で栄えた村だったが、燃料の主体は木材から石油に変わり、今は目立った産業はない。しかし、「あなたのふるさとはどこですか。」と聞かれればわたしは迷わずこの旧吉備郡池田村の名を上げる。池田村はわたしが生まれた時にはすでに総社市に合併していたし、小学校も中学校も高校も総社市にある学校に通った。そして、今は総社駅の南に住んでいるのだから、総社市をふるさとと考えるべきだとは思いますが、どうもそういう気持ちになれないでいる。

山すそに寄り添うように建つ家々、同級生の友だち、先輩、後輩、そして、多くの方は亡くなってしまったけれども、学校の行き帰りに声をかけてくれたおじいさんやおばあさん、おじさんやおばさん。今も昔と変わらぬ山や川を見るたびに、いなかのおっとりとした雰囲気が思いだされる。それがわたしのふるさと意識なのかもしれない。また、学校を卒業して以来、40年近く県内各地の学校に勤務してきたことも関係していそう。今まで8つの小学校に勤務し、その都度その小学校区に所属感を感じてきたし、二度にわたってお世話になっている船穂学区には今、強い愛着を感じている。勤務場所への所属意識が居住地への所属意識を上回っているのかもしれない。

「ふるさとを愛し」ということを子どもに求める前に、我々がふるさとをどう考えているかをはっきりさせておく必要があると思う。郷土愛を育むというと、すぐに地域の特産物や有名な先人の話が取り上げられ、それによって学区を誇りに思うようにさせるという実践を思いつくが、わたしはどうもしっくりこない。それも重要なことだと思うが、「ふるさと意識」は、自然や産業、そこに住む人とのかかわり、家族や友だちや先生とのかかわりといった大変裾野の広いものによって形作られているように思う。

池田村はわたしにとって、すべてここから始まった場所という気持ちが強い。自分の根はここにあるといった意識のように思える。人から見れば、不便この上なく人の数もどんどん減ってきている辺りな村にすぎない。さして誇るものもないこの村がわたしのふるさとである。